

神奈川県男性Bさん(85)の体調が急に悪くなったのは今年4月の終わりの頃。それまでは身の回りのことを自分でこなしていたのに、息苦しさを訴え、まったく食事をとらなくなった。

体が弱って、受け答えもはつきりしない。同居する長女(59)が病院に連れて行くこととするが、動くこともできない。救急車を呼び、湘南鎌倉総合病院(神奈川県鎌倉市)に運ばれた。

同病院総合内科医師の渡辺晋二さんの診断は「高カルシウム血症」。血液中のカルシウムの濃度が高すぎ

て、意識がぼーっとする、食欲が出ない、だるい、尿が大量に出る、などの症状が表れる。Bさんはこうした症状に加え、尿が大量に出たことで脱水も起こしていた。

一部のがんにかかると、高カルシウム血症を起すことがあるが、検査の結果、



高カルシウム血症で入院した男性を診察する渡辺医師(鎌倉市の湘南鎌倉総合病院で)

骨粗しょう症薬で副作用

高齢患者は珍しくはないという。

同病院総合内科部長の北川泉さんたちが2010年から13年までの4年間に高カルシウム血症で、同病院に入院した65歳以上の患者71人を調べたところ、35人(49%)にがんが見つかったが、次いで多かったのが骨粗しょう症の治療薬の副作用23人(32%)で、10人(14%)は副甲状腺の病気が

だった。北川さんは「高齢で高カルシウム血症の患者

さんが来たら、必ず薬の副作用も疑います」と話す。

副作用を起した骨粗しょう症の薬はほとんどがビタミンD製剤だった。高齢者では、薬の効き方に個人差があり、効き過ぎることがあるらしい。「骨粗しょう症の治療でビタミンD製剤は重要な薬だが、飲むときは、定期的に血液中のカルシウム濃度も測ってもら

うことが大切」と北川さんは指摘する。

Bさんにはがんは見つからなかった。血圧を下げる薬や睡眠薬など9種類の薬を飲んでいたが、その中に骨粗しょう症の治療薬の一つでカルシウムの吸収をよくする「ビタミンD製剤」があった。これかもしれない。渡辺さんは思った。

すぐにビタミンD製剤を中止し、水分を補う点滴でカルシウムの濃度を低くした。体に水分がたまると心臓に負担がかかるので、心

臓の働きを強める強心剤と、尿を出す利尿剤を使いながら体内の水分量を調整した。途中、感染症にかかってしまい、抗菌薬の点滴などが必要になったため入院が長引いたが、「入院する前よりだいぶ元気になりました」と長女は話す。

骨粗しょう症の推計患者数は約1300万人とされる。高齢者にはありふれた病気の一つだが、治療薬で高カルシウム血症を起す

臓に負担がかかるので、心臓の働きを強める強心剤と、尿を出す利尿剤を使いながら体内の水分量を調整した。途中、感染症にかかってしまい、抗菌薬の点滴などが必要になったため入院が長引いたが、「入院する前よりだいぶ元気になりました」と長女は話す。